

わくわく子ども学校設立趣意書

(2001年2月24日作成)

(1) 設立の目的

1960年代以降、日本は驚異的な経済発展を遂げ、物質的に豊かな社会を実現しました。しかしその反面、社会にさまざまな歪みを生じさせ、人びとは不安やストレスを感じながら毎日を暮らしています。大人ばかりでなく子どもたちもまた、いじめや不登校、学級崩壊といった現象にみられるように、学校といった社会で生きることの困難を感じています。学校の危機の背景には、個人の欲望を肥大化させる産業社会の進展といった大きな問題がありますが、学校システムそのものに内在する問題も看過できません。

これまで当然とされてきた、学年毎に学習内容を規定する教育課程、教科書中心の授業、教師から子どもへの一方通行の教授方式などが時代にそぐわなくなっていることが、最近では認識されるようになってきました。そして、従来の標準的な学力を獲得させるための教育から個性を重視する教育へと学校教育の目標が変わりつつありますが、人間の個性とは何か、どのようにしてそのような教育を行うのかといった点についての議論がまだ不十分のように思われます。

私たちは、教育におけるこれらの問題を根本的解決するには、従来の『産業社会に適応できる人間を育成するための教育』から、生徒の自発的な学ぶ意欲に基づいた『人間の自然な成長を支援するための教育』へのパラダイムの転換が必要だと考えています。

子どもを主体とする教育

今から160年ほど前、デンマークの教育改革者グルントヴィは書物中心の教育をする学校を『死の学校』とよび、人と人の対話すなわち『生きた言葉』による教育をする学校を『生の学校』とよびました。その考えは今日の北欧諸国のフォルケ・ホイスコーレやフリー・スコレとよばれるオルタナティブ・スクールに受け継がれています。世界中で最も自由な学校とよばれたイギリスのサマーヒル・スクールの創立者のA. S. ニールは「子どもたちの感情的抑圧を取り除くことによって、より自由な人間になれる」といい、その考えは今日の多くのフリー・スクールの教育方針となっています。フランスのフレネ学校の創始者セレスタン・フレネは「子どもは自分が役立ち、自分に役立ってくれる理性的共同体の内部で、自己の人格を最大限に発展させる」といっているように、子どもたちはお互いの労働を組織し、協働するなかで人間的交流を深め、発達していくものと考えています。アメリカのサドベリーバレー・スクールのダニエル・グリーンバーグは「子どもたちは好奇心によって自ら学ぶ」といい、教師や学校の役割は、そのための用意周到な環境を整えることにあると考えています。

市民の手で学校をつくろう！

私たちは、これらの先達の教えに習い、子どもたち自らの意思で学ぶ新しいタイプの学校を構想しました。この学校は生徒数80人くらいの小規模で、そこでは生徒とスタッフが生活をともにしながら、エコロジカルで民主的な教育がなされます。そこでの教師の役割は、将来必要になる知識や技術を教え込むことではなくて、子どもたち一人ひとりの自立的な成長のプロセスを支援することにあります。この学校には、子どもたちが心ゆくまで遊び、学ぶための十分な時間と空間が用意されています。そのような教育環境のもとでなら、子どもたちは抑圧から解放され、本来の好奇心を呼び覚まし、学ぶことの喜びを知り、自分らしい生き方を追求することができるでしょう。

私たちは、以上の構想を実現するために、NPO法人の小中学校を2004年に開設することを目標に設立の準備をすすめています。

(2) 教育の方針

大人と子ども、先生と生徒、これらの境界線を取り払い、年齢や立場にかかわらず対等な人間として尊重しあうときに、本当の学びの場が形づくられます。そのような場で、子どもたちが自らの欲求によって学ぶとき、それは自分の世界が広がる喜びの経験となります。子どもたちは、このような経験を積み重ねることによって、自己に対する信頼を強固なものにし、肯定的な自己像を確立することができるのです。

わたしたちは、生徒たちがこの学校でのさまざまな経験を通して、民主的で共生的な生き方を学び、既成の概念や権威に盲従することなく、自分自身の考えで判断し、行動していくことができる、自立した人間に育ててほしいと思っています。

自発的な学び

人は何のために学校で学ぶのでしょうか。将来、よい職業につくためでしょうか。それとも、社会に貢献するためでしょうか。それらは親や学校の要求であって、本当の学びの欲求はもっと個人的な動機に基づいています。それは「いったい全体、自分のまわりの世界のしくみはどうなっているのだろうか？」「このことが起こるのはなぜだろうか？」「自分はこのことができるようになりたい！」といった好奇心や向上心によるのです。

人は自分自身の生活のなかで学ぶ必要を切実に感じたときにもっともよく学びます。赤ん坊が言葉を覚えるのは、まわりの人びとに自分の要求を分かってもらいたいという切実な欲求があるからです。わたしたちは生徒たちに知識を押しつけるのではなくて、かれらが求めるまで

はじっと見守り、かれらの要求があったときにはじめて学びを支援するのが教師の本来の役割だと考えています。

自己決定と自治

この学校では個人の自由が尊重され、生徒たちが自分で考え、自分で決定し、行動することが奨励されます。自由というと、とかくわがまま、放縦と混同されますが、自由に生きることには、自分自身を律する厳しさと、行為の結果に対する責任が要求されます。

自由には他者の自由も含まれますから、当然のことながらそこには自分の自由と他者の自由との間に葛藤が生じます。この2つの自由の間の葛藤を民主的なやり方で調整することによって、民主主義の社会が成り立つのです。個人の自由は尊重されなければなりません、同時に個人と個人とが協力してものごとを進めていくことが大切です。

この学校の生活が生徒たちにもスタッフにとっても快適であるためには、共同生活のための守るべきルールとその実効性を保証するための組織が必要です。この学校では、学校の運営に関わる重要な事項や校内で起こった問題の解決は、ミーティング（全校集会）やコミティー（委員会）において話し合われます。これらへの参加は民主主義の実践のまたとない機会を与えます。

共生的な生活

21世紀は、これまでの大量生産・大量消費の社会から、持続可能な社会へと変わっていくでしょう。そして、人間の過剰な欲望をコントロールし、自然と人間との関係が調和のとれた暮らし方、すなわちエコロジカルな暮らし方が大事になるでしょう。

この学校では、国籍・年齢・学力・障害の有無・家庭状況などに関係なく、いろいろな個性をもった人たちが集まり、それぞれが個としての違いを認め合いながら、人と人、人と自然の関係が調和のとれた共生的な暮らし方を学んでいきます。

このような生活の体験の中から、生徒たちは共感・思いやり・協力・分かち合いといった共生的な価値観を自得し、信頼や貢献といった社会に対する積極的な関心や態度を身につけることができるでしょう。

(3) 教育の特徴

多様な学びの方式

カリキュラムによる学習には、教科学習、個別学習、テーマ学習の3つの方式があります。教科学習の授業では、教科書の知識を習得することよりも、生徒と学習支援者（スタッフ）との『対話』による相互作用が重要と考えています。

個別学習は、生徒が学習支援者と相談して学習プログラムをつくり、教科またはそれ以外の科目を自主的に学ぶものです。

テーマ学習は、主として衣食住などの人間の生活における基本的なことがらをテーマにして、ワークショップやフィールドワークによって体験的に学ぶもので、この学校のカリキュラムの中核をなすものです。

遊びとファンタジー

子どもたちは遊びの中で、生活に必要な知識や技術を学びます。しかもそれだけでなく、子どもたちが遊びの世界に没入しているとき、子どもたちの内面の世界が豊かに拓がります。自己意識に目覚める前の子どもたちは、現実と想像との境界が曖昧で、半分はファンタジーの世界に住んでいます。この時期にファンタジーの世界を十分に味わっておくことは人間の『たましい』の成長にとって決定的に重要なのです。たましいが順調に育った子どもたちは、感情が豊かで、しかも情緒的にも安定しています。

わたしたちは、子どもたちに伝承あそびや物語などの世界に親しませ、子どもたちが心の中でイメージーションを十分に働かせることのできる機会を提供したいと思っています。

自己表現活動

『自己表現』は、人間のもつ基本的な欲求です。小さな子どもは、自分が考えたことや、感動したことを表現せずにはいられません。それをせき止めることは、子どもの成長にとって有害です。なぜならそれは生きている人間の自然な反応だからです。

音楽、美術、文学、演劇、ダンスなど手段は何であれ、自己表現は他人との関係を円滑にしますし、相互理解に役立ちます。また豊かな表現は、それ自体が美的なパフォーマンスであり、自他に深い感動を与えます。そして、自己表現の技術の習得は、これからの人生において大いなる喜びを与えてくれることでしょう。

民主的な合意形成

ミーティングとコミティーはこの学校における合意形成の場であり、この学校の最も重要な教育機能のひとつです。ミーティングでは、学校の運営に関わる重要な事項、たとえばカリキュラム、行事、予算、人事などについて話し合わせ、決定がなされます。これらの決定には生徒とスタッフが同等の権利を持っており、年齢や立場に関係なくフランクな議論を行うことによって、全員が納得できる結論に達することができるのです。

コミティーでは、学校の運営に関わる重要な事項についての検討や、生徒間で生じたトラブルの調停などを行いません。生徒たちはこのような民主的な合意形成のプロセスに参加するな

かで、自由と責任のあり方を身をもって学びます。

エコロジカルな生活の体験

今日の暮らしの中では衣・食・住に関するものはお金を出せば何でも手にはいるため、わたしたちは自らモノを作るという経験はほとんどありません。この学校では、花や農作物を栽培したり、動物を飼育するという体験を持つことが奨励されます。それは自然の営みや生命の尊さを学んでほしいと思うからです。また料理、手芸、工作、食品加工などを自らの手で行うことによって、日常の生活に必要な技術を身に付けるとともに、自然環境に対して負荷をかけることの少ないエコロジカルな暮らし方を学んでいきます。

(4) カリキュラムと評価

カリキュラム

学習の方式には教科学習、個別学習、テーマ学習の3つがあります。

教科学習の教科には、日本語、算数、外国語の3つの基礎科目といくつかの選択科目があり、選択科目は生徒自身の関心に応じて選ぶことができます。これらの授業では、共同作業が必要な科目を除いては、基本的に生徒の興味や進度に合わせた個別指導がなされます。

個別学習は、教科科目やそれ以外の科目を生徒一人ひとりが独自の学習プログラムで学ぶ学習方式です。

テーマ学習は、生徒たちが自分の関心のあるテーマについて、ワークショップやフィールドワークで学ぶものです。たとえば、園芸、料理、食品加工、大工仕事、地域研究など。

これらの学習活動は、学年や固定したクラスを前提とはしません。異年齢の子どもたちで構成されるクラスやグループで行われます。従来の同一年齢のクラス制をなくすことによって、わたしたちは生徒たちを一かたまりの集団としてみる見方から解放され、生徒の一人ひとりを個人として見るができるようになります。

学習評価から成長の記録へ

教師にとって最も悩ましいのは、生徒の学習成果を評価をすることです。わたしたちは一般の学校で行われている試験の点数による評価や、生徒に序列をつける相対評価はこの学校には相応しくないと考えます。

教師がテストあるいは主観によって生徒の学習成果を評価することは、結果的には大人の考えに従うことを教えることになります。評価する者と評価される者という関係がある限り、相手を対等な人間として尊重するという関係が成り立ち難くなりますし、子どもの自然な成長を支援するという、わたしたちの目標を損なうことになります。

そこで、生徒の成績をテストで評価するというやり方に代わるものとして、たとえば生徒の活動を客観的に記録するというやり方が考えられます。これによって教師は生徒の成長の軌跡と現在の関心事をすることができるでしょう。

わたしたちは、子どもの成長はこうあるべきだという先入観を捨てて、生徒個人の成長の過程を虚心に見つめることから始めようと思います。そして生徒の一人ひとりについて、その人の個性（持ち味）を把握するように努めます。

（５）生徒定員と教育・運営組織

生徒定員：80名（6～15歳）

教育組織：専任スタッフ7名、非常勤スタッフ7名、事務・校務スタッフ2名

運営組織：

全校集会（生徒、スタッフ）、各種委員会（生徒代表、スタッフ代表）

スタッフ会議、理事会（親代表、スタッフ代表、生徒代表）

（６）施設計画

立地場所：交野市、高槻市、箕面市あたりで、池または川のほとり。駅から5km以内。

自然環境に恵まれた里山で、雑木林があり、日当たりのよい緩斜面が望ましい。

敷地面積：16,500㎡（5千坪）

校舎用地 5,000㎡、運動場 3,000㎡、

附属施設用地 2,000㎡、緑地 6,500㎡

所要施設：校舎、研修施設

《将来計画：体育館兼集会施設、職員宿舎、作業場》

建設費：

・施設建築費	10,000万円
校舎	8,000万円
研修施設	2,000万円

『大阪に新しい学校を創る会』

代表：辻 正矩 事務局：エコハウス